

日本軍政下のジャワ島における宣伝工作

－雑誌『ジャワ・バル*Djawa Baroe*』の表紙を中心に－

織田康孝*
Yasutaka908@yahoo.co.jp

＜目次＞

- | | |
|------------------------------------|-----------|
| 1. はじめに | 4. 創られた女性 |
| 2. 『ジャワ・バル <i>Djawa Baroe</i> 』の創刊 | 5. 創られた男性 |
| 3. 表紙からみえてくるもの | 6. おわりに |

主題語: 『ジャワ・バル*Djawa Baroe*』(DjawaBaroe), 宣伝工作(Propaganda), ジャワ新聞社(DjawaShinbunsha), 軍政(Military Administration), 演出(Staging), ジャワ(Java), グラフ雑誌(Pictorial Magazine)

1. はじめに

アジア・太平洋戦争開戦後、日本軍は南方各地域の要所を破竹の勢いで進攻し、占領していった。本稿の対象地域であるインドネシアのジャワ島は1942年3月9日、今村均中将率いる第16軍によって占領され、その後日本の降伏時まで軍政が敷かれることとなる。

南方各地域の軍政方針は占領前からすでに決定されていた。すなわち、1941年11月20日の大本営政府連絡会議で「南方占領地実施要領」が決定し、南方各地域における軍政遂行にあたっての基本的方針が明文化された。その方針は「1,治安の恢復、2,重要国防資源の急速獲得、3,作戦軍ノ自活確保」[防衛庁防衛研究所戦史部編(1985):91]であった。基本的に南方各地域の占領軍は、この「南方占領地実施要領」の方針に従い、軍政を敷いていくこととなる。「南方占領地実施要領」の方針2および方針3を通じて南方各地域のいずれの占領軍も資源の獲得に重きを置くとともに、物資の調達を現地で行おうとしていたことがうかがえる。

ジャワ島占領後、日本は、現地住民の軍政協力の呼びかけおよび当初からの目的である

* 立命館大学 文学研究科 博士課程前期

資源の獲得をスムーズに行うため、様々なメディア(その具体的な例として、映画、演劇、音楽、紙芝居、グラフ雑誌、新聞、ラジオなど)を利用した宣伝工作を展開した。

本稿では、これらメディアの中でもとりわけジャワ新聞社から刊行されていたグラフ雑誌『ジャワ・バル*Djawa Baroe*』(以下、『ジャワ・バル』と記す。)を考察対象とし、軍政当局が行った、宣伝工作の一端を解明していく。なお、後述するが、ジャワ新聞社とは朝日新聞社が1942年12月8日にジャワ島において設立した新聞社である。

ジャワ島における宣伝工作に関する研究は現在までに多くの蓄積がある¹⁾。しかし、個別にみると、映画、紙芝居、ラジオなどの研究は深化しているが、グラフ雑誌の研究はいまだ十分になされていない。

ジャワ島を含むアジア・太平洋地域におけるグラフ雑誌の研究は、ジェンダー²⁾や写真家の作品³⁾などといった視点の研究はあるものの、「宣伝工作の一道具としてのグラフ雑誌」といった視点からの研究は遅れているように思われる。「宣伝工作の一道具としてのグラフ雑誌」という立場からの先駆的な研究として、玉井清編『戦時日本の国民意識——国策グラフ誌『写真週報』とその時代』、井上祐子(2006)「“東亜の盟主”のグラフィックス——アジア・太平洋戦争期の対外向けグラフ雑誌を比較して」、井上祐子(2009)『戦時グラフ雑誌の宣伝戦——十五年戦争下の「日本」イメージ』が挙げられる。[井上(2006)]では、アジア・太平洋戦争期に刊行されていた各グラフ雑誌の位置づけおよびそれぞれが担った役割について明らかにしている。井上は、朝日新聞社のグラフ雑誌は、「従来から庶民たちの防空演習や各種団体の軍事訓練の報道に長けていた」[井上(2006):145]といい、「報道に力点があり、写真の<表現性>あるいはモダニズム的組写真の<観念>性ということに対する関心が薄く、宣伝への意識が希薄であった。…(中略)…現実の<再現>あるいは<記録>にとどまる部分が多かった」[井上(2006):151-152]と指摘する。

[井上(2009)]では、『ジャワ・バル』のグラフページに着目し、誌面上にみられる「日本の盟主性」や「日本軍」を描き出している。井上が指摘するように、『ジャワ・バル』のグラフページは、各種行事・訓練等の報道に長けており、ジャワ社会で起こっていた「現実」を再現していたと思われる。さらに、井上は、誌面上に登場する現地住民たちは、「かくある姿」だったが、一方で「かくあるべき姿」[井上(2009):288]であったという。しかし、表紙を含む誌面

1) その代表的なものの例として、[早稲田大学大隈記念社会科学研究所編(1959)] [カナヘレ(1967)] [倉沢(1989)] [後藤(1989)] [倉沢(1992a)] [倉沢(1992b)] [百瀬(2003)]などが挙げられる。

2) 『写真週報』を題材として取り上げ、同雑誌上に見られるジェンダー表象を浮き彫りにした研究として、[家永梓(2011)] [加納実紀代(2000)] [加納実紀代(2004)]などが挙げられる。

3) 写真家の作品といった立場からの先行研究として[白山/堀編(2006)]および[多川(2005)]などが挙げられる。

に登場する被写体に着目すると、そのほとんどが軍政当局によって「創られた現地住民」であったということが判明する。後述するが、当時を生きたインドネシア人たちの回想録と『ジャワ・バル』の表紙上に登場するインドネシア人たちとを比較すると、矛盾点がみられ、全てとは言わないまでも、「演出」がなされているということが明らかとなる。いわば、日本側によって意図的に創られた「現実」であったといえよう。

以上にみたように、従来、『ジャワ・バル』をめぐる研究では、主に『ジャワ・バル』のグラフページのみが注目され、論考が進められてきたが、グラフページのみでは『ジャワ・バル』を利用した宣伝工作がいかなるものであったのかを結論付けることはできない。そこで、本稿では、グラフ雑誌を利用した宣伝工作の一端を解明するために、雑誌の顔である表紙に焦点を当て、軍政当局が表紙を利用しいかなる手法を用いて現地住民に対して宣伝工作を行っていたのかを明らかにしていく。

最後に、朝日新聞社と軍の関わりについて少し触れておきたい。当時のジャワ島では現地軍によってさまざまな規制がかけられていた。また、当時、憲兵隊の活動も活発であったようで、当時ジャワ新聞會常任理事の谷口五郎は戦後の回想録で「新聞は活気を失って官報となり、新聞記者は官報記者となり下がっていった」[谷口(1953):128]と回想している。このことから、当時ジャワ島に存在した報道機関は、軍によって検閲がなされており、かなりの程度軍の息がかかったものとなっていたと推察できる。

以上のことを踏まえて、本稿では、『ジャワ・バル』を単に新聞社がいわゆる「現実」を報道する雑誌とみなさず、軍政当局の意向を反映する宣伝色が強く、教化性をもった雑誌という立場から論を進めていく

2. 『ジャワ・バル』*Djawa Baroe*の創刊

本章ではまず、グラフ雑誌『ジャワ・バル』の発行元であるジャワ新聞社の設立経緯について概略し、グラフ雑誌『ジャワ・バル』の基本的な事項を確認していきたい。

日本占領初期のジャワ島には宣伝班(宣伝部の前身)が存在し、同島における宣伝活動を担っていた⁴⁾。そして、1942年の秋、すなわち、南方各地域における軍政機構が整備され

4) 宣伝班の詳細な活動については、[町田敬二(1967)][町田敬二(1978)][松尾嘉雄(2003)]などを参照されたい。

た頃、内地の新聞社が南方に進出していくこととなった。陸軍担当地域における各新聞社の経営担当地域は以下の通りである。

朝日新聞社：ジャワ島

東京日日新聞社および大阪日日新聞社：フィリピン

同盟通信社と地方新聞13社(合同提携)：マレーおよびシンガポール

読売新聞社：ビルマ

[朝日新聞百年史編修委員会編(1991):618]

各紙の担当地域は最終的に上掲のようであったのだが、当時、ジャワ島の経営委託権をめぐる争いがあった。その対立にはいくつかの理由が挙げられる。その大きな理由として、「ジャワ島は治安が良く、食料および生活物資が充実しており、日本では宝の島と宣伝されていた」[谷口(1991):273]ことが挙げられている。

各社から絶大な人気を集めていたジャワ島であったが、結局、朝日新聞社が経営委託権を勝ち取り、新聞の刊行に取り掛かることとなった。以下にジャワ島において朝日新聞社が経営委託を獲得するまでの経緯を明らかにしていく⁵⁾。

軍政初期におけるジャワ島では、宣伝班が陣中新聞『うなばら』を刊行していた。宣伝班は1942年3月はじめ、ジャカルタ入市と同時に東印度日報社を接收し、同社で陣中新聞を刷っていた。オランダ政庁はすべての建物を敵産管理していたため、紙も活字も機械も残されていた。その後、ジャカルタ市最大のオランダ語新聞*Java Bode*⁶⁾を印刷していたユニー工場が接收されて、宣伝班は本格的に陣中新聞を印刷することとなった。しかし、東印度日報社からユニー工場への引越しの際に、活字の約半数をトラックの事故により川に落としてしまった。したがって、一度用いた活字を解版して再び使用せざるをえず、活字の母型と鑄造機がなければ新聞を刊行できない状況にあった。

このような状況下に、朝日新聞社の村山長挙社長(当時)がジャワ島へ視察に訪れた。村山はジャワ島に到着してすぐに、今村均司令官を表敬訪問した。村山がジャワ島に到着したときは、すでにジャワ島の経営委託権をめぐる争いが各社によって行われていた。ジャワ島での経営を望んでいた村山は、谷口五郎を呼び出し、第16軍に対して朝日新聞社に何かできることはないか、と尋ねたところ、谷口から活字不足の事情を説明された。その後、村山は日本に戻り、間もなくして、朝日新聞社からジャワ軍司令部に対して、日本

5) 以下の記述については、[谷口(1974):129-130][谷口(1991):273-274][早稲田大学大隈記念社会科学研究所編(1959):251-256]に依拠した。

6) タイトルの*Java Bode*(ジャワ・ボーデ)は、「ジャワの伝達者」を意味する。

の活字に使用する完全な字母と鑄造機が寄贈された。この寄贈がきっかけとなり、1942年9月10日に陸軍報道部長の谷荻那華雄が朝日新聞社に対して以下のような指示を出し、経営委託を行った。すなわち、『『従來の経験と能力とを活用し、その人員資材、資金を供出し、軍管理の下に新聞社の設立並にその経営を行なひ』、また、『現地軍政の施行に協力し、日本文化の進出興隆に努め、現地邦人の啓発、原住民の教化に當り、土語及び外字新聞の指導若くは直接運営に任ず』』といった指示[ジャワ新聞社(1944):176]である。1942年10月中旬に鈴木文四郎が新聞刊行の準備委員としてジャワ島に来島した。そして、同年12月8日の興亜祭を期して、『ジャワ新聞』を創刊と同時にジャワ新聞社が設立された。

続いて、ジャワ新聞社の出版活動についてみていきたい。

ジャワ新聞社の出版活動は多岐にわたった。それは、日本語新聞『ジャワ新聞』の刊行にはじまり、インドネシア語紙『アジア・ラヤ(Asia Raya⁷⁾)』の吸収合併、『ジャワ年鑑』(1944年7月)の出版、そして日本語月刊雑誌『新ジャワ』⁸⁾の刊行(1944年12月)である。さらに、1942年12月から軍政監部の公報たる『治官報』の刊行を担当した[倉沢(1992c):9]。

ジャワ新聞社は上述の出版物以外にも、グラフ雑誌『ジャワ・バル』の刊行を行なっていた。以下に『ジャワ・バル』の概要を明らかにしていく⁹⁾。

雑誌『ジャワ・バル』は、1943年1月1日に軍政当局の指示により創刊された。雑誌タイトルの『ジャワ・バル(Djawa Baroe)』は日本語訳すると「新ジャワ」という意味である。当時ジャワ島では宣伝文句として、「Djawa Baroe(新ジャワ)」という言葉がいたるところで叫ばれていた。例えば、日本軍の上陸記念日である新ジャワ祭や日本に協力する新ジャワの建設などである。この雑誌は、「新ジャワ」とタイトルが付けられていることから宣伝色を帯びたグラフ雑誌であったということがうかがえる。この雑誌は隔週であり、毎月1日および15日の月2回発行で、最終号の1945年8月1日号までに全63冊が刊行された。毎号約34ページの雑誌で、発行部数は3万5000部[朝日新聞百年史編修委員会編(1995):322]であった。『ジャワ・バル』の販売場所は、以下の通りである。

7) タイトルのAsia Rayaは、「大アジア」を意味する。

8) この『新ジャワ』は、『ジャワ・バル(Djawa Baroe)』(日本語で『新ジャワ』と訳すことができる)とは異なるものである。

9) 以下の概要の記述については、基本的に[倉沢(1992c):1-13]に依拠しているが、筆者が新たに付け加えた部分もある。

資料 2 - 1 『ジャワ・バル』販売場所一覧表

各地	ジャワ新聞取次店
各地	アジアラヤ取次店
スラバヤ	スアラアジア新聞社営業部
バンドゥン	チャハヤ新聞社営業部
ジョクジャカルタ	シナルマタハリ新聞社営業部
スマラン	シナルバルー新聞社営業部
各地書店	
ジャワ新聞本社	

(〔倉沢編(1992a)〕(『ジャワ・バル』皇紀2603年3月15日号)をもとに筆者作成)

上掲の表から、『ジャワ・バル』はジャワ島の広範囲で販売されていたということがうかがえる。

この雑誌の創刊の目的として、皇紀¹⁰⁾2603年1月1日号に「創刊の辞」が掲載されている。

この「創刊の辞」では、日本側は『ジャワ・バル』を宣伝工作に利用するものではなく、あくまで、お互いの交流のための道具であることを強調したものとなっていることが明らかである。

しかし、『ジャワ・バル』創刊前の1942年12月20日付の日本語新聞である『ジャワ新聞』には、以下の広告が掲載されている¹¹⁾。

ジャワ新聞社は明春一月一日を期して、新たにグラフ雑誌ジャワ・バルー新ジャワを創刊します。同誌は日本とジャワを中心とした南方共榮圏その他世界各地の出来事を寫眞によつて報道し、原住民を啓蒙しインドネシア人をして益々日本に對する認識を深めしめ、大東亞戦争完遂に邁進せしめることを目的とします。同胞讀者各位は右の趣意を御諒承本紙同様御支持をお願いします。何卒一部でも多く原住民にもお勧めを、今からお願いしておきます。(傍線引用者-注)

10) 『ジャワ・バル』の表紙には、西暦表記がされておらず、皇紀表記のため本稿においても原史料に従って皇紀表記とした。なお、皇紀2603年は西暦1943年、皇紀2604年は西暦1944年、皇紀2605年は西暦1945年に当たる。

11) 以下の広告は1942年12月20付『ジャワ新聞』の一面に掲載されている。

上での広告文をみると、お互いの交流のためではなく、現地の住民を啓発するための雑誌であり、読者対象も邦人向けというよりは、現地住民向けであるということが判明する。

倉沢愛子は『ジャワ・バル』の特色として、「その幅広さと大衆性」[倉沢(1992c):10]を挙げている。つまり、当時の『ジャワ・バル』以外の定期刊行物をみると、例えばイスラム関係者向けの雑誌*Asjoe'lah*¹²⁾、*Soeara MIAI*¹³⁾、*Soeara Moeslimin Indonesia*¹⁴⁾やインドネシア人兵士向けの*Pradjoerit*¹⁵⁾など対象読者が限定化されていることが分かる。また、対象が限定化されていない*Pandji Poestaka*¹⁶⁾など一般向けの雑誌もあったが、筆者が実際に確認したところ、写真掲載ページは少ない。

一方で、『ジャワ・バル』は写真をふんだんに利用し、幅広い年代が読みやすくなるように編集されている。1920年代頃のジャワ住民の文盲率は95%だったといわれているので¹⁷⁾、写真を多く利用した『ジャワ・バル』は知識人のみならず、幅広い層に読まれていたということをおしはかることができる。

そして、同誌の記事やキャプションは日本語とインドネシア語の両言語で書かれている。値段は2603年2月1日号まで15銭で、2603年2月15日号以降より、ページ数が増えたため20銭とされた。さらに2605年8月1日号(最終号)は30銭に値上げがなされている。

3. 表紙からみえてくるもの

それでは、『ジャワ・バル』の表紙の基本情報について述べていく。『ジャワ・バル』の表紙は主に人が主体となった写真が使われており、ほぼ毎号に日本語およびインドネシア語の両言語でキャプションが付けられている。皇紀2603年1月1日号から2604年3月1日号までは表紙に値段が表記されていたが、2604年3月15日号以降は値段表記がなされていない。

12) タイトルの*asjoe'lah*(アシュラー)は、「ヒジュラ暦1月の第10日目」を意味する。

13) タイトルの*Socara MIAI*(スアラ・ミアイ)は、*Majlis Islam A'laa Indonesia*の略であり、「インドネシア・イスラム大会議」を意味する。

14) タイトルの*Soeara Moeslimin Indonesia*(スアラ・ムスリミン・インドネシア)は、「インドネシアイスラム教徒の声」を意味する。

15) タイトルの*Pradjoerit*(プラジュリット)は、「兵士」を意味する。

16) タイトルの*Pandji Poestaka*(パンジ・プスタカ)は、「図書館の旗」を意味する。

17) [レント(1972):147]を参照。

本章ではこの表紙について、それらの表紙がもたらすイメージを文章化し、加えて登場人物や登場するものについてのデータを取りまとめ、稿末の「付録資料1 表紙にみられるイメージ一覧表」(以下、「イメージ一覧表」と記す)として客観化した。さらに、その資料をもとに登場人物の男女比率(「付録資料2 表紙に登場する男女の比率」(以下、「男女比率」と記す)を参照)をデータとしてまとめ、さらには国籍比率をデータとしてまとめた(「付録資料3 表紙に登場する人物の国籍別比率」(以下、「国籍別比率」と記す)を参照)。

まず、「付録資料1 イメージ一覧表」をみていく。表紙写真には、いくつかの号を除き、ほぼ毎号にキャプションが付けられている。表紙写真におけるイメージとキャプションを比較してみると、特に矛盾は生じていなかった。それゆえ、『ジャワ・バル』におけるキャプションは、単に表紙写真の説明をするにとどまっているということが判明した。

続いて、登場人物の「男女比率」をみると(「付録資料2 男女比率」を参照)、女性の登場比率が38%、男性の場合が49%、そして男女が同時に登場する割合が13%となっている。このように男女比率については、男性の方が女性に比べて登場率が多いことが明らかとなっている。しかし、女性の登場比率も決して少なくはない。

さらに、「国籍別比率」をみると(「付録資料3 国籍別比率」を参照)、インドネシア人の登場率が全体の67%を占めており、次いで日本人の22%となっている。ここで特筆しておくべきことが二点ある。それは、女性が登場する表紙の場合は、そのほとんどがインドネシア人であるという点である。さらに二点目は、男性が表紙に登場する場合は、日本人およびインドネシア人の両者がおおよそ均等に登場しているということである。両者とも、表紙に登場する際は軍服を着用していたり、軍事演習を行うなど軍をイメージさせるようなすがたで登場していることが多い。

4. 創られた女性

表紙に女性のみが登場する回数は、『ジャワ・バル』全63号のうち24号分である。これら表紙写真の女性たちは主に複数で登場することが多く、そのほとんどがインドネシア人である。また、女学生が多いことも特徴の一つである。今回、筆者が24号分全体に目を通した結果、女性が登場する写真における三つの特徴を見いだすことができた。それは次の三点である。

1、精神面での日本化

2、日本文化の浸透

3、顕在資源の重要性

まず、「1、精神面での日本化」を考察していく。インドネシア人女学生が写っている写真は、以下の二点に重点が置かれていた。すなわち、「①戦争協力への促進」および「②日本のイデオロギーを民衆に対して植え付ける」という二点である。「①戦争協力の促進」についての写真は、皇紀2603年3月15日号、2604年1月11日号、2604年8月1日号、2604年11月15日号に掲載されていた。稿末の「付録資料1 イメージ一覧表」からも明らかな通り、前述の4号全てが「日本に協力する女学生」というイメージを創りだす写真であると同時に、軍政当局が「女学生＝戦争協力」という図式のイメージ付けを行っていたと推察できる。また、これらの4号分の表紙上に登場する小道具に着目してみると、それらは登場人物の場合と同様に重要な宣伝材料となっていることが明らかである。例えば、そこで登場する小道具、つまり、日章旗、ドラム、防衛義勇兵の帽子、そして薙刀などは全てが日本および軍に関係するものである。これら小道具はそれぞれの表紙上に登場する女学生たちと密接に関わっており、大げさに言えば、小道具なしでは「戦争協力」を表現できないほど、重大な役割を果たしていることがうかがえる。

日本側が『ジャワ・バル』においてこれらの「戦争協力を促した写真」に掲載する意図は、バルカ・アルガニス・バスウェダン(女性)の回想からも明らかである。その内容をみると、当時は憲兵隊の存在により人びとが日本に協力することを恐れており、自分から進んで仕事をしようとする人はおらず、「怖がる人の方が多かった」[インドネシア国立文書館編(1988):72-73]という。この回想から、当時のインドネシア人は日本軍、とりわけ憲兵隊に対して恐怖を抱いており、日本軍に対して非協力的であったということがうかがえる。しかし、前述の4号分の写真に登場する学生の表情に着目すると、「恐怖」というよりはむしろ、「笑顔」・「真剣」といった表情を醸し出している。このように、回想録での記述と表紙に登場する女学生の表情を比較することで、矛盾が感じられる。この矛盾を通じて、日本側が表紙写真における人びとの表情を通じて「日本に協力する女学生」を創り出し、戦争協力を促した宣伝工作を行っていたという事実の裏付けになるものと考えられる。

次に、「②日本のイデオロギーを民衆に対して植え付ける」ことを試みた表紙写真についてみていきたい。先に取り上げた4号分の表紙をみると、女学生が集団で写っている写真はどれもが規律正しく、かつ整列して写っているということが明らかである。これが軍人を被写体として軍の規律を表現した写真であれば指摘するに及ばないが(軍では規律が

求められ、一般民衆とは異なるため)、軍人よりも庶民的な女学生を表紙に登場させ規律の正しさを表現することに意味があったように思われる。つまり、女学生という一般民衆を登場させることによって、「一般民衆の集団行動のあり方」を可視化し、そのイメージを一般民衆に植え付けたかったように思われる。

実際に日本軍は施策の面でも隣組の制度を取り入れたりするなど[倉沢(1992a):242]、民衆に日本流の相互扶助精神を植え付けようと力を注いでおり、それと同様に表紙写真においても日本社会をモデルとした、「集団行動のあり方」を表現し、精神面からも日本化を推進する試みがあったように思われる。これらの日本化を理想とした宣伝工作は米英の個人主義を払拭しようとしたものであろう。このことについて、陸軍中佐の竹田光次は「日本の精神文化を徐々に理解せしめる様持つてゆくことが必要であらう」[竹田(1943):29]と言明していた。

日本化を推進した写真は、前述のもの以外にも皇紀2604年5月1日号にみられる。この写真でもやはりインドネシア人女学生が登場しているが、登場人数は1人である。写真をみると、集団行動とは少し違った「規律の正しさ」を表現する道具として平均台が登場している。元来インドネシアには無かった平均台を表紙上に登場させることによって、器械体操における「規律正しさ」を通じて、律することの大切さをアピールしているように解釈できる。それは、日本の精神力を表現、紹介し、そして前述と同様にそれを民衆に対して植え付けるという思惑があったように思われる。

続いて「2、日本文化の浸透」の特徴をみていく。ここでは、インドネシア人女性を被写体とすることで「日本の文化」の受容を推進したことがその特徴として挙げられる。この種の写真は、皇紀2603年1月15日号、2603年8月15日号、2604年1月1日号、2605年1月15日号の4号分にみられる。

皇紀2603年1月15日号、2603年8月15日号、2604年1月1日号の表紙に登場するインドネシア人女性たちはみな着物を着用している。これは日本側が日本の伝統文化である着物を小道具として扱い、着物の着用に憧れをもたせようとしたと解釈できる。つまり、日本の伝統文化に憧れを抱かせ、日本文化をジャワ島に浸透させようという思惑があったと言ってもいいだろう。例えば、2603年1月15日号では、プルボチョロコPoerbotjoroko博士¹⁸⁾の娘が着物姿で登場している。さらに2604年1月1日号の表紙写真ではスカルノ

18) プルボチョロコ(1884-1964)は、スラカルタ(ジャワ島中部)に生まれ、植民地時代から独立時代を通じて、もっとも高名なジャワ人の「ジャワ学」者である。独立後はガジャマダ大学、インドネシア大学教授を歴任して、後進の指導に当たった[土屋(1991b):388]。

Soekaroeno¹⁹⁾の妻が登場し、スカルノ夫人が着物の着付けをされている。また、一方で2603年8月15日号の表紙写真では、着物を着用したインドネシア人の一般女性が登場している。前述の3号の表紙写真からは、それぞれ以下のような特徴が挙げられる。

- ① 皇紀2603年1月15日号では、被写体の体を少し右斜めにし、右手で葉っぱの先端を軽くもつというポーズをさせることによって、着物を着る女性が「おしとやか」かつ「上品」というイメージが演出されている。
- ② 皇紀2603年8月15日号では、被写体に着物を着用させ、日本風の踊りを踊ることによって「日本文化」を演出させている。また、被写体が笑顔で踊っていることから、「着物を強要させられ着用している」という感じを排除し、「みずから進んで着用している」という演出が創り出されている。
- ③ 皇紀2604年1月1日号では、着物の着付けをされている被写体を笑顔にすることによって、着物を着ることが喜ばしいことであるという演出がなされている。

以上のことから、日本はインドネシア人女性を利用し、被写体の笑顔を使った演出を行うことによって、インドネシア人に抵抗なく日本の文化を取り入れさせる努力をしていたということが判明する。さらに、著名人の娘や妻を登場させることによって日本文化に対する、ある種の「憧れ」をもたせていたように思われる。

最後に「3、顕在資源の重要性」の特徴をみていきたい。ここでの特徴としては、日本が重要作物獲得を期待し、女性を利用したことが挙げられる。この種の写真は皇紀2605年2月15日号および2605年5月1日号にみられる。2605年2月15日号の表紙写真は女学生たちが綿花を摘んでいるものである。一方2605年5月1日号には、インドネシア人の娘がヒマの実を収穫している表紙写真が掲載されている。これら2枚の表紙写真では、綿花およびヒマの実を収穫している女性を表紙上に登場させるのみで、特にこれといった演出がなされているようには思えない。とはいえ、綿花およびヒマの実が表紙に登場していることから、日本側の意図を容易に読み取ることができる。当時日本では綿花を重要視していた。このことは、農林省による「大東亜共栄圏内の農産物」(『週報』第280号、1943年2月18日)からも明らかである。すなわち、「文化の高度化に伴い、一人当り綿花消費量は増大の傾向を

19) スカルノ(1901-1970)は、スラバヤに生まれ、学生時代より政治運動に関わるようになった。1927年7月4日にインドネシア国民党(PNI)を結成してその党首となり、民族の大同団結とインドネシアの独立と植民地政府に対する非協力の立場を唱道して、たちまち新しい時代のチャンピオンとなった。日本軍政期には、日本との協力姿勢をみせ、軍政期を通じて、インドネシア民族第1の指導者としての確固たる地位を築き上げた。独立後も、インドネシア共和国の初代大統領(在任1945-1967)として、民族のトップであり続けた[土屋(1991a):227-228]。

示すを通例とする。東亜の新秩序と共に各民族の生活は向上し、綿花の需要はますます大となるだろう」[防衛庁防衛研究所戦史部編(1985):224]とされた。また、「共栄圏内で綿花資源を如何にして調達するかは現下並びに将来の重要問題といわねばならない」[防衛庁防衛研究所戦史部編(1985):224]と綿花の重要性が指摘されている。綿花は「衣料対策の緊要性」[ジャワ新聞社(1944):64]として重視されており、五ヵ年計画が施行されたり、その計画実施団体として爪哇綿花栽培協会が設立されていた²⁰⁾。

一方で、ヒマの実も綿花同様に重要な作物であった。軍政当局はヒマの栽培を農民たちに義務づけたのであった。ヒマの種子は油成分を含み、その種皮を取り除き搾ると、ヒマシ油を抽出することができる。当時のヒマシ油の用途は以下のものであった。「緩化剤として医療上重要なも潤滑油及び其の他の工業原料油としても亦用途多く特に溶融點低きを以て航空發動機用の潤滑油として好適なり」[倉沢編(1990):395]。

前述から、綿花およびヒマの実も重要視されていたことが明らかである。軍政当局は『ジャワ・バル』の表紙を利用し、綿花およびヒマの実収穫を促したと考えられる。なお、綿花およびヒマの実も農民はもちろんのことであるが、婦人会²¹⁾もそれらの収穫を行うよう義務づけられていた。このことは、当時、婦人会に参加していたハフニ・ザフラ・アブ・ハニファ(女性)の回想をみて明らかになる。彼女は、「ヒマの木の実を取って、ニッポンの兵隊に差し出したりしました」[インドネシア国立文書館編(1988):122]と当時を振り返っている。さらに「私たちは、綿の実を集めてきては、糸を紡いだものです」[インドネシア国立文書館編(1988):123]と回想している。

また、ハッジャ・アミナ・ルジン(女性)は、「私たちがフジンカイで熱心に行ったことは、綿花を栽培したり、糸を紡いだり、そして機織りをしたりするように人びとに呼びかけることでした」[インドネシア国立文書館編(1988):129]という。

以上の記述からもわかるように、軍政当局は作物を収穫する際は農民以外、特に婦人会を中心とした女性を利用しており、収穫および宣伝活動を行わせていたようである。それだけにとどまらず、さらに軍政当局は『ジャワ・バル』の表紙写真にも綿花およびヒマの実を収穫する女性(女学生および娘)を登場させ、「模範」とすることで、婦人会に参加していない一般のインドネシア人女性に対して作物の収穫を促すとともに、インドネシア人女性の

20) ジャワ島における綿花栽培の概要は、[倉沢(1992a):113-118]に詳しい。

21) 婦人会とは、日本軍政下で1943年に設立された軍政支援のための住民組織のことである。活動は戦時下の困窮生活緩和のための生活改善運動的なものや、さらには軍政協力に向けて女性を動員するものが中心であった。ジャワの場合、各地方の県長・群長・村長夫人たちをリーダーとして、都市部ではかなり活発な活動が行われていたが、農村部ではあまり浸透しなかった[倉沢(1991):376]。

役割を伝えようとしたのであった。また、綿花とヒマの実を表紙に登場させることによって、ジャワ島における重要作物の存在を伝えたかったのであろう。

5. 創られた男性

表紙に男性のみが登場する回数は、『ジャワ・バル』全63号のうち31号分である。女性が表紙に登場する際はほとんどがインドネシア人女性であったが、男性の場合、インドネシア人が16号分に登場し、一方で日本軍人のみの登場が13号分であった。残りの2号分は両国男性が同時に登場しているものである。そこで、本章ではインドネシア人男性のみが表紙に登場する場合および日本軍人のみが表紙に登場する場合の二種類に分けて、考察を行っていきたい。

インドネシア人男性のみが登場する表紙は、そのほとんどすべてが「男性と戦争への動員」に焦点が当てられていた。インドネシア人男性が登場するほとんどの表紙写真は学生やPETA(Pembela Tanah Air²²⁾の略、以下「PETA」と記す)の郷土防衛義勇兵(以下、「防衛義勇兵」と記す)のことが多い。この種の写真は、皇紀2603年6月15日号、2603年10月1日号、2603年10月15日号、2603年11月15日号、2604年8月15日号、2604年10月15日号、2605年3月1日号、そして2605年4月15日号に掲載されている。これら写真のほとんどにPETAが利用されている。PETAは治政令第四十四号(昭和十八年十月三日公布)『「ジャワ」防衛義勇軍編成ニ關スル件」[ジャワ新聞社(1944):452]によって正式に発足した。

軍政当局のPETA創設の意図を倉沢は「日本軍兵力の補強という観点から考え出されたもの」[倉沢(1992a):322]と指摘する。さらに、軍政当局は独立問題²³⁾を通じての「民心離反」を懸念したためにPETAを創設したということが挙げられる。当時、インドネシアの民族主義者たちは、「独立達成のためには、よく訓練され、インドネシア人の指揮官をいただいた独自の軍隊が必要であることを、これまでに強く痛感していた」[倉沢(1992a):326]。PETAを創設しなければ民族主義者たちの心が離れていってしまう可能性があり、また民族主義者たちの協力がなくなると民衆の心が離れていく可能性は十分にあった。

PETAを創設することは軍政当局にとって、民族主義者たちとの関係が良好に保つことが

22) Pembela Tanah Airは「郷土防衛」を意味する。

23) 「大東亜政策略指導大綱」(昭和十八年五月三十一日御前會議)でフィリピンとビルマはそれぞれ独立が容認されていたが、ジャワ島の独立は容認されなかった[防衛庁防衛研究所戦史部編(1985):49]。

でき、かつ上述の「日本軍兵力の補強」という利益になることであった。

では、どのような演出で軍政当局は防衛義勇兵たちを表紙上に登場させたのであろうか。表紙写真上での演出に際しての特筆すべき点を以下に挙げておきたい。

- 1、防衛義勇兵たちが何かを叫びながら、右手を空の方向に上げている(皇紀2603年10月15日号)。

この表紙写真では、防衛義勇兵たちの勇ましいすがたが強調されている。

- 2、2人の防衛義勇兵がラッパを吹いている(皇紀2604年10月15日号)。

ここではラッパを小道具として登場させることによって防衛義勇兵をより軍人らしく演出させている。

- 3、防衛義勇兵たちが対空射撃演習を行っている(皇紀2605年3月1日号)。

この写真では、防衛義勇兵たちが草むらに隠れており、空に向け照準を合わせている。これら防衛義勇兵の写真は「勇ましさ」および「泥臭さ」を演出している。

軍政当局は防衛義勇兵の「勇ましさ」を演出することによって民衆に対して「男性の憧れである防衛義勇兵」を創り出し、民衆動員を図ろうとしていたということがうかがえる。また、「勇ましさ」に「泥臭さ」を付け加えることによって、「頑張っている」防衛義勇兵を演出させることに成功したといえよう。つまり、軍政当局は民衆への啓発を行い、「アジア・太平洋戦争は日本だけの戦いではなく、インドネシア民族の戦いでもある」と意識付けを行っていたと推察できる。

続いて、日本人が登場する表紙写真について考察していく。

日本人男性が表紙に登場する写真は、2603年9月15日号の1号分を除き、全てが軍人である。それら写真の特徴は「男性と子ども」である。以下に、「男性と子ども」をキーワードとしての解釈を進めていく。

「男性と子ども」が掲載されているのは、皇紀2603年2月1日号、2603年9月15日号、そして2604年6月15日号である。これら写真の特徴は以下の通りである。

- 1、日本兵4人に対して、子どもたちが敬礼をしている(皇紀2603年2月1日号)。

この表紙写真では、子どもたちが「笑顔」または「真剣」といった表情をみてとれる。

- 2、山本義章ジャカルタ州長官がインドネシア人の赤子を抱いている(皇紀2603年9月15日号)。

この表紙写真上に登場する州長官は、「笑顔で優しい」印象である。

- 3、日本軍人1人とインドネシアの子どもたちが車に乗って遊んでいる(皇紀2604年6月15日号)。

ここではみな笑顔でインドネシアの子どもの1人が日本軍人の肩に手を置いている。

以上の2および3にみられるように、二枚の写真両方に共通して「笑顔で優しい」日本人が登場している。しかし、当時日本人は憲兵隊の存在もあって、インドネシアの人びとから恐れられていた。そこで軍政当局は、「笑顔で優しい」日本人を表紙上で創り出すことによって、「インドネシア人に恐れられる日本人」というイメージの払拭を試みた。また、子どもを表紙上に登場させることによって、より「笑顔で優しい」日本人を創り出したのであった。このことは皇紀2603年5月15日号にもみられる。同号は日本軍人がオウムを手のひらに置いている写真であり、「勇ましい」雰囲気はみられず、むしろ「優しい」雰囲気である。軍政当局は子どもの代わりに動物を表紙上に登場させたことで、「勇ましさ」を払拭し、「優しい」軍人像を創りあげたのであった。つまり『ジャワ・バル』の表紙上で創られた日本軍人は「英雄」というよりはむしろ、「庶民的で優しい軍人」であったといえよう。

一方で1は、2や3とは違った演出がなされている。1では子どもを表紙に登場させることによって「英雄像」が演出されている。このことは、子どもが敬礼をしていることから明らかである。表情は笑顔であるにしろ、やはり日本軍人に対しては敬意を払わなければならないということを連想させたかったように推察できる。

6. おわりに

前章までにみたように、軍政当局は『ジャワ・バル』の表紙上に主に人を被写体として登場させ、彼らに当局の思惑を反映する演出を施すといった宣伝工作を展開してきた。

表紙上に登場する現地住民たちは軍政当局によってそれぞれ役割を与えられていた。例えば、表紙上に登場する現地住民の女性たちは「日本に協力」し、「日本の文化」を取り入れた、換言すれば、「日本化」がなされた女性たちであった。一方で、現地住民の男性たちは、「日本の指導の下に頑張る」または「勇ましい」男性たちであった。そして、表紙上に登場する日本人たちは、子供や動物と一緒に登場することによって現地住民から「恐れられる日本人」ではなく「親しみのある、優しい日本人」たちであった。

日本軍政下のジャワ島では、現地住民たちが日本側の様ざまな思惑で兵捕、労務者、婦人会など各団体に動員されていた。それと連動する形で、住民たちが被写体となり、『ジャ

ワ・バル』の表紙上にも動員され、現地住民たちの「模範」として創られていたということが本稿で明らかとなった。

以上、本稿では、軍政当局がジャワ島で行った宣伝工作の一端を解明してきた。それと同時に今後の課題も明らかとなった。この課題を提示することで、本稿の結びとしたい。

本稿では、『ジャワ・バル』の表紙のみに着目し、表紙を利用した宣伝工作を解明してきたが、もちろんこれは軍政当局が同誌を利用して行った宣伝工作の一部である。今後、軍政当局が『ジャワ・バル』を通じて行った宣伝工作を明確にしていくためには、グラフページおよび同誌に掲載された音楽や小説などさまざまな側面を視野に入れ検討していく必要がある。そして、これらの考察を行うことで、軍政当局の宣伝工作を浮き彫りにすることができると同時に、日本軍政下のジャワ島におけるグラフ雑誌の役割が明らかとなるのである。

【参考文献】

- 秋元憲(1943)「南方映畫工作について」『國際文化』第25号、國際文化振興會
 浅野健一(1997)『天皇の記者たち-大新聞のアジア侵略』スリーエーネットワーク
 朝日新聞百年史編修委員会編(1991)『朝日新聞社史-大正・昭和前期編』朝日新聞社
 _____(1995)『朝日新聞社史資料編』朝日新聞社
 家永梓(2011)「『写真週報』に見る人物表象の量的分析」『評論・社会科学』第95号、同志社大学社会学会
 板垣鷹穂(1942)「社會施設紹介と宣傳工作(特輯・大東亞共榮圈への宣傳工作)」『宣傳』第8号、日本電報通信社
 稲葉信龍/早川富之助/濱田健治/橋本徹郎/土門拳/長島喜三/矢吹勝二/小林正壽/小松清/湯沢光行/松本昇/平野謙信(1941)「對外宣傳グラフの役割と新方向」『報道寫眞』第10号、寫眞教會出版部
 井上祐子(2006)「“東亞の盟主”のグラフィックス——アジア・太平洋戦争期の對外向けグラフ雑誌を比較して」『立命館大学人文科学研究紀要』第86号、立命館大学人文科学研究所
 _____(2009)『戦時グラフ雑誌の宣伝戦-十五年戦争下の「日本」イメージ』(越境する近代7)、青弓社
 今村均(1970)『私記・一軍人六十年の哀歓』芙蓉書房
 _____(1971)『続・一軍人六十年の哀歓』芙蓉書房
 岩村正史(2008a)「『写真週報』に見る民間防空」、玉井清編『戦時日本の国民意識-国策グラフ誌『写真週報』とその時代』(叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 36)、慶應義塾大学出版会
 _____(2008b)「『写真週報』に見るドイツ観」、玉井清編『戦時日本の国民意識-国策グラフ誌『写真週報』とその時代』(叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 36)、慶應義塾大学出版会
 インドネシア国立文書館編(1988)『ふたつの紅白旗-インドネシア人が語る日本占領時代』木犀社(=倉沢愛子/北野正徳訳(1996))
 大辻清司(1988)「グラフ・ジャーナリズム」、鶴見俊輔/粉川哲夫編『コミュニケーション辞典』平凡社
 奥健太郎(2008a)「『写真週報』に見る労務動員」、玉井清編『戦時日本の国民意識-国策グラフ誌『写真週報』とその時代』(叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 36)慶應義塾大学出版会
 _____(2008b)「『写真週報』に見る『住民運動』」、玉井清編『戦時日本の国民意識-国策グラフ誌『写真週報』とその時代』(叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 36)慶應義塾大学出版会

- 奥健太郎(福岡聡史(2008)『写真週報』に見る学生・生徒・児童 玉井清編『戦時日本の国民意識-国策グラフ誌『写真週報』とその時代』(叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 36)慶應義塾大学出版会
- 小田義幸(2008a)『写真週報』に見る食料問題 玉井清編『戦時日本の国民意識-国策グラフ誌『写真週報』とその時代』(叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 36)慶應義塾大学出版会
- (2008b)『写真週報』に見る模範的国民生活 玉井清編『戦時日本の国民意識-国策グラフ誌『写真週報』とその時代』(叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 36)慶應義塾大学出版会
- 門松秀樹(2008)『写真週報』に見る戦局報道と軍事情報 玉井清編『戦時日本の国民意識-国策グラフ誌『写真週報』とその時代』(叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 36)慶應義塾大学出版会
- カナヘレ、ジョージ・S Kanahle, George S.(1967)『日本軍政とインドネシア独立』維新報知社(=後藤乾一/近藤正臣/白石愛子訳(1981))
- 加納実紀代(2000)『大東亜共栄圏』の女たち-『写真週報』に見るジェンダー 池田浩次/加納実紀代/川村湊/木村一信/栗原幸夫/長谷川啓編『戦時下の文学-拡大する戦争空間』(文学史を読みかえる④)、インパクト出版会
- (2004)「戦争プロパガンダとジェンダー表象-『写真週報』を中心に」『人民の歴史学』第161号、東京歴史学研究会
- 河合政(1974)「ジャワの日本人」池田佑編『大東亜戦史-第4回配本 蘭印編』富士書苑
- 木村一信(2004)『昭和作家のく南洋行>』世界思想社
- 倉沢愛子(1991)「ふじんかい 婦人会 fujinkai」、土屋健治/加藤剛/深見純生編『インドネシアの事典』(東南アジアを知るシリーズ)同朋舎出版
- (1989)「日本軍政下のジャワにおける映画工作」『東南アジア—歴史と文化—』第18号、東南アジア史学会
- (1992a)『日本軍政下のジャワ農村の変容』草思社
- (1992b)「インドネシア」吉川利治編『近現代史のなかの日本と東南アジア』東京書籍
- (1992c)「解題」倉沢愛子編『南方軍政関係資料⑧ ジャワ新聞社刊 復刻版 ジャワ・バル [第1巻]』龍溪書舎
- 倉沢愛子編(1989a)『治官報 第1巻』龍溪書舎
- (1989b)『治官報 第2巻』龍溪書舎
- (1990)『軍政下ジャワ産業綜観 [第1巻]』龍溪書舎
- (1992a)『南方軍政関係資料⑧ ジャワ新聞社刊 復刻版 ジャワ・バル [第1巻]』龍溪書舎。
- (1992b)『南方軍政関係資料⑧ ジャワ新聞社刊 復刻版 ジャワ・バル [第2巻]』龍溪書舎
- (1992c)『南方軍政関係資料⑧ ジャワ新聞社刊 復刻版 ジャワ・バル [第3巻]』龍溪書舎
- (1992d)『南方軍政関係資料⑧ ジャワ新聞社刊 復刻版 ジャワ・バル [第4巻]』龍溪書舎
- (1992e)『南方軍政関係資料⑧ ジャワ新聞社刊 復刻版 ジャワ・バル [第5巻]』龍溪書舎
- (1994)『南方軍政関係資料⑭ ジャワ軍政規定集[1]』龍溪書舎
- 後藤乾一(1979)「戦前期インドネシアにおける日本人ジャーナリストの活動-『南方関与』の一事例」『社会科学討究』第24巻第3号、早稲田大学アジア太平洋研究センター
- (1989)『日本占領期インドネシア研究』龍溪書舎
- (2011)「アジア太平洋戦争と『大東亜共栄圏』1935-1945年」和田春樹/後藤乾一/木畑洋一/山室信一/趙景達/中野聡/川島真編『アジア太平洋戦争と『大東亜共栄圏』1935-1945年』(岩波講座東アジア近現代通史第6巻)岩波書店

- 清水斎(1991)『民衆宣撫ひとすじに』、インドネシア日本占領期史料フォーラム編『証言集——日本軍占領下のインドネシア』龍溪書舎
- 清水唯一郎(2008)『国策グラフ『写真週報』の沿革と概要』玉井清編『戦時日本の国民意識-国策グラフ誌『写真週報』とその時代』(叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 36)、慶應義塾大学出版会
- ジャワ新聞社(1944)『ジャワ年鑑(昭和19年)』ジャワ新聞社(=1973)『ジャワ年鑑(昭和19年)復刻版』ビブリオ
- 白山眞理/堀宣雄編(2006)『名取洋之介と日本工房[1931-45]』岩波書店
- 多川精一(2005)『焼跡のグラフィズム 『FRONT』から『週刊サンニユースへ』』(平凡社新書268)平凡社
- 竹田光次(1943)『南方軍政下に於ける文教状況』『国際文化』第25号、国際文化振興會
- 多仁安代(1999)『日本軍占領下のインドネシアにおける日本語教育-現地発行の日本語新聞をめぐって』『太平洋学会誌』第82/83号、太平洋学会
- 谷口五郎(1953)『ペンに倚りて』、田村吉雄編『秘録大東亜戦史7 蘭印篇』富士書苑
- _____ (1974)『ジャワ新聞始末記』、池田佑編『大東亜戦史——第4回配本 蘭印編』富士書苑
- _____ (1991)『ジャーナリストとしてみたジャワ軍政』、インドネシア日本占領期史料フォーラム編『証言集——日本軍占領下のインドネシア』龍溪書舎
- 玉井清(2008)『『写真週報』に見る英米観とその変容』玉井清編『戦時日本の国民意識-国策グラフ誌『写真週報』とその時代』(叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 36)慶應義塾大学出版会
- _____ (1991a)『スカルノ Sukarno (1901~1970)』、土屋健治/加藤剛/深見純生編『インドネシアの事典』(東南アジアを知るシリーズ)同朋舎出版
- _____ (1991b)『プルボチョロコ R.M.NgPurbocoroko (1884~1964)』土屋健治/加藤剛/深見純生編『インドネシアの事典』(東南アジアを知るシリーズ)同朋舎出版
- 恒石重嗣(1978)『心理作戦の回想-大東亜戦争秘録』東宣出版
- 霽岡聡史(2008)『『写真週報』に見る東アジア観』玉井清編『戦時日本の国民意識-国策グラフ誌『写真週報』とその時代』(叢書 21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態 36)、慶應義塾大学出版会
- 寺田近雄(2011)『完本 日本軍隊用語集』学研パブリッシング
- 利光正文(1991)『マンスルKiai Haji Mas Mansur(1896~1946)』土屋健治/加藤剛/深見純生編『インドネシアの事典』(東南アジアを知るシリーズ)同朋舎出版
- 永積昭(1977)『東南アジアの歴史』(新書東洋史⑦)講談社
- 春山行夫(1942)『大東亜共榮圏への宣傳工作(特輯・大東亜共榮圏への宣傳工作)』『宣傳』第8号、日本電報通信社
- 深見純生(1991)『スタルジョ・カルトハディクスモSutarjoKartohadikusumo(1882~1976)』、土屋健治/加藤剛/深見純生編『インドネシアの事典』(東南アジアを知るシリーズ)同朋舎出版
- 深見純生編(1993)『日本占領期インドネシア年表』インドネシア史研究会
- 防衛庁防衛研究所戦史部編(1985)『史料集 南方の軍政』朝雲新聞社
- 堀公一(1942)『戦時報道寫眞への期待』『報道寫眞』第2巻第6号、寫眞協會
- 町田敬二(1967)『戦う文化部隊』(原書房・100冊選書11)原書房
- _____ (1978)『ある軍人の紙碑——剣とペン』芙蓉書房
- 松尾嘉雄(2003)『ジャワ派遣部隊——宣伝班従軍記』エヌ・アンド・エー企画
- 百瀬侑子(2003)『知っておきたい戦争の歴史-日本占領下インドネシアの教育』つくばね舎
- 森田朋子(2006)『スメラ学塾をめぐる知識人達の軌跡-太平洋戦争期における思想統制と極右思想団体』『文化資源学』第4号(2005年度)文化資源学会
- 矢野暢(1975)『「南進」の系譜——日本の南洋史観』(中公新書)中央公論社
- _____ (1979)『日本の南洋史観』(中公新書)中央公論社

米山桂三(1942)「南方宣傳工作に就いて(特輯・大東亞共榮圈への宣傳工作)」『宣傳』第8号、日本電報通信社
吉田裕(2007)『アジア・太平洋戦争』(シリーズ 日本近現代史⑥)岩波書店
レント、J・A Lent, John A. 編(1972)『アジアの新聞』東出版(=小松原久夫/梶谷素久訳(1972))
早稲田大学大隈記念社会科学研究所編(1959)『インドネシアにおける日本軍政の研究』紀伊國屋書店

【新聞】

「新しいグラフ雑誌 ジャワ・バルー」『ジャワ新聞』、1942年12月20日、マイクロフィルム(国立国会図書館
所蔵)

논문투고일 : 2013년 12월 10일
심사개시일 : 2013년 12월 20일
1차 수정일 : 2014년 01월 09일
2차 수정일 : 2014년 01월 15일
게재확정일 : 2014년 01월 20일

付録資料1 表紙にみられるイメージ一覧表

凡例

1. 以下の表中に、「<なし>」と記載されている場合は、表紙上にキャプションが付けられていないということを意味する。
2. 以下の表中に、「<不明>」および「*」と記載されている場合は、表紙上にキャプションが付けられているが、印刷が不鮮明であり、文字の解読が不可能であることを意味する。

([倉沢編(1992a)]/[倉沢編(1992b)]/[倉沢編(1992c)]/[倉沢編(1992d)]/[倉沢編(1992e)])をもとに筆者作成)

皇紀 (西暦)	号数	キャプションの日本語	表紙写真イメージ	登場人物 日本人	登場人物 インドネシア人	登場 人物 国籍 不明	登場する もの
		キャプションのインドネシア語					
2603年 (1943年)	2603年1 月1日号 (第1号)	ナカ ヨク アソブニツボン ト インドネシア ノ コドモ Kanak-kanak Nippon dan kanak-kanak Indonesia, jang sedang bermain-main bersama-sama dengan ramah tamah.	インドネシア人児童(6~ 7歳)と日本人の女の子(10~12歳)がボール遊びをしている。	子ども(女)1	子ども(男)2 子ども(女)1	—	着物、民族衣装
2603年 (1943年)	2603年1 月15日号 (第2号)	ニッポン ノ キモノヲ キタ ブルボチョロコハカセ ノ レイジョーラットナ サン Poeteri Retna Hianawati, poetera toean Dr. Poerbotjoroko, jang berpakaian Nippon.	インドネシア人の娘(16~18歳)が着物を着用している。	—	若者(女)1	—	着物
2603年 (1943年)	2603年2 月1日号 (第3号)	ニッポン ノ ヘイタイサン ニ アイサツ スル コドモ タチ Kanak-kanak jang memberi hormat kepada para peradjoerit Nippon.	児童(10歳くらい)および 幼児(2~5歳)が日本兵 に対して敬礼をしている。	軍人(男) 4	子ども(男)4 子ども(女)2	—	軍服、銃、 民族衣装
2603年 (1943年)	2603年2 月15日号 (第4号)	グンセイカン オカザキセイザブロー カッカ Goensei-kan Padoeka Toean Besar Seizaboero Okazaki.	日本の軍人が何かを読 んでいる。	軍人(男) 1	—	—	軍服、飾 緒
2603年 (1943年)	2603年3 月1日号 (第5号)	ソーリョク ケツシュウ ウンドー(トクシュウ)、 ニツショーキ オ カカゲル ヨーチエン ノ コドモ タチ (ジャカルタ ニテ) NOMOR ISTIMEWA: "POESAT TENAGA RA'JAT" „Moerid2 taman kanak-kanak sedang menaikkan bendera Matahari terbit (Di Djakarta).	児童(6~7歳)たちが日 章旗を掲揚している。	—	子ども(男)3 子ども(女)11	—	日章旗、 民族衣装
2603年 (1943年)	2603年3 月15日号 (第6号)	トクシュウ「シンジャワ サイ」、「シンジャワサイ」オ オイワイ スル ワカバ ジョシ ギガイ ガッコー ノ セイト タチ NOMOR ISTIMEWA: OENTOEK MENGENANGKAN HARI PEMBANGONAN DJAWA BAROE Moerid2 Sekolah kepandalan poeteri “Wakaba” sedang merajakan hari penbangoenan Djawa Baroe.	インドネシア人女学生 たちが笑顔で日章旗を 振っている。	—	学生(女)17	—	日章旗、 民族衣装

24) ベチャ(becak)とは、インドネシアの伝統的な乗り物で、人力車である。

25) サルンsarungとは、ムスリムが礼拝時に着用する腰巻きである。

2603年 (1943年)	2603年4月1日号 (第7号)	ジャワ デ カツヤク スル コーゲン ユーシ PARA PAHLAWAN JANG SEDANG BERGERAK DI DJAWA.	ジャングルで日本軍人 たちが演習を行っている。	軍人(男) 3	—	—	軍服、銃
2603年 (1943年)	2603年4月15日号 (第8号)	ジャワ ノ クダモノ 「ジュロック マニス ブッサール」 BERGEMBIRA MEMETIK BOEAH “DJEROEK MANIS BESAR”!	インドネシア人の成人 女性(20代後半)が果物を 収穫している。	—	成年(女)1	—	果物、民 族衣装
2603年 (1943年)	2603年5月1日号 (第9号)	ノーミン ドージョー ノ カイコンサギョー (ジャカルタ バツサル ミング) PEKERDJAAN MINGGOESAHAKAN TANAH DI “LATIHAN PERTANIAN” (PASAR MINGGOE-DJAKARTA).	インドネシアの成人男 性(30代)たちが畑を耕し ている。	—	成年(男)7人	—	鍬、作業 着
2603年 (1943年)	2603年5月15日号 (第10号)	オーム オ アイ スル ソラ ノ ユーシ(ジャワ ニテ) PAHLAWAN OEDARA JANG MEJAJANG BOEROENG KAKATOE(DI DJAWA).	航空隊員がオウムを見 ている。	軍人(男) 1	—	—	オウム、 軍服(航 空部隊)
2603年 (1943年)	2603年6月1日号 (第11号)	ジャカルタ イカ ダイガク ノ ジョシ ガクセイ PARA PELADJAR POETERI DISEKOLAH TABIB TINGGI DIAKARTA JANG BAROE DIBOEKA.	インドネシア人女子学 生が顕微鏡を使い、授 業を受けている。	—	学生(女)2	—	顕微鏡、 制服
2603年 (1943年)	2603年6月15日号 (第12号)	ジャカルタ ショトー チューガク セイ PENOEH SEMANGAT MELATIH BADAN! (MOERID2 SEKOLAH MENENGAH PERTAMA No.II, DJAKARTA).	男子学生たちが上半身 裸で整列し、ランニン グをしている。	—	学生(男)10	—	制服(上 半身は裸)
2603年 (1943年)	2603年7月1日号 (第13号)	ジャワ デ デキ タ ニッポン ダネ ノ スイカ SEMANGKA-NIPPON JANG MEKAR DI DJAWA.	インドネシア人の娘(10 代後半)2人がスイカを 持ちお互いを見合っ ている。	—	若者(女)2	—	スイカ、 民族衣装
2603年 (1943年)	2603年7月15日号 (第14号)	トクシュー 「トージョー シュショー」、トージョー シュショー ト デムカエ ノ サイコー シキカン(ジャワ) NOMOR ISTIMEWA “PERDANA MENTERI TODJO”, P.J.M PERDANA MENTERI TODJO JANG TIBA DI DJAWA DAN P.J.M SIKIKAN JANG MENJAMBOETNJA.	軍人が軍人を出迎えて いる。	軍人(男) 2	—	—	軍服
2603年 (1943年)	2603年8月1日号 (第15号)	ボードクメン ツケテ シゴト スル ケンペータイ(ジャワ ポーク クレン) KEN PEI TAI JANG MEMAKAI KEDOK GAS(LATIHAN PENDJAGA BAHAJA OEDARA DI DJAWA).	ガスマスクをつけた軍 人2人が何かを書いて いる。	軍人(男) 2	—	—	ガスマ スク、軍服
2603年 (1943年)	2603年8月15日号 (第16号)	ニッポン ノ キモノ オ キテ オドリ ノ ケイコ(インドネシア ノ ムスメ サン) GADIS INDONESIA JANG SEDANG MEMPELADJARI TARI DENGAN MEMAKAI PAKAIAN NIPPON.	インドネシア人の娘(10 代後半)が日本の着物を 着用し、日本風の踊り を踊っている。	—	若者(女)1	—	着物

2603年 (1943年)	2603年9月1日号 (第17号)	ジャワ プロモサン ノ フンカコー KAWAH GOENOENG BROMO.	海軍および陸軍の両軍人がジャワにある山の火口を視察している。	軍人(男) 2	—	—	軍服
2603年 (1943年)	2603年9月15日号 (第18号)	カワイイ アカチャン オ ダク ヤマモト ジャカルタ シュー チョーカン yamamoto, DJAKARTA SJOETJOKAN, MENDOEKOENG ANAK BAJI JANG MANIS.	日本人がインドネシア人の赤子を笑顔で抱っこしている。	文官(男) 1	赤子 1	—	軍服
2603年 (1943年)	2603年10月1日号 (第19号)	トクシュー「キョード ボーエイ」、ジャワ デンキ ジギョー コーシヤ ノ セーネン NOMOR ISTIMEWA: “MEMBELA TANAH AIR”, PEMOEDA DJAWA DENKI DJIGJO KOSJA.	インドネシアの青年(10代後半)2人が斜め上を向き、空を見つめている。	—	若者(男) 2	—	防具、牡丹槍
2603年 (1943年)	2603年10月15日号 (第20号)	トクシュー「キョード ボーエイ ギューグン」、「ジャワ ボーエイ ギューグン」 ガ ウマレ コエ タカラカ ニ パンザイ オ サケブ インドネシア セイネン NOMOR ISTIMEWA: “TENTARA MEMBELA TANAH AIR”, PEMOEDA INDONESIA JANG BERSORAK “HIDOE! “MENJAMBOET LAHIRNJA TENTARA PEMBELA” TANAH AIR“DI DJAWA.	防衛義勇兵たちが右手を空に向け、何かを叫んでいる。	—	防衛義勇兵(男) 4	—	軍服
2603年 (1943年)	2603年11月1日号 (第21号)	チューオー サンギカイ ニ オケル スカルノ ギチョー Ir.SOEKARNO, SEBAGAI KETOEA DALAM SIDANG TJOEO SANGI-IN.	スーツを着たインドネシア人の男性(40代)が演説を行っている。	—	成人(男) 1	—	スーツ(フラワーホールにリボン付きの円形のものを刺している)、マイク
2603年 (1943年)	2603年11月15日号 (第22号)	ニッポンゴ オ ベンキョー スル ジャワ ボーエイ ギューグン カンプ anggota pasoean tjalon-opsir tentara pembela tanah air jg sedang beledjar bahasa nippon.	PETA幹部たちが日本語を勉強している。	—	防衛義勇兵(男) 3	—	軍服、日本語教科書
2603年 (1943年)	2603年12月1日号 (第23号)	ベイエイ ゲキメツ オドリ TARI MEROENTOEHKAN AMERIKA DAN INGERIS.	インドネシア人の娘(10代後半)が民族衣装を着用し、弓を空の方向に向けている。	—	若者(女) 1	—	日章旗、民族衣装、弓
2603年 (1943年)	2603年12月15日号 (第24号)	<なし>	日本軍の軍服を着用している幼児(3~4歳)に対して母親が微笑んでいる。	—	成人(女) 1 子ども(男) 1	—	軍服、銃剣、民族衣装
2604年 (1944年)	2604年1月1日号 (第1号)	キモノヲ キテ、 ヨロコブ スカルノフジン NJONJA Ir.SOEKARNO BERGIRANG HATI MENGENAKAN KIMONO.	インドネシア人成人女性が着物の着付けをインドネシア人成人女性に行っている。	—	成人(女) 2	—	着物、民族衣装
2604年 (1944年)	2604年1月15日号 (第2号)	<なし>	女学生5人がマーチの行進を行っている。	—	学生(女) 5	—	制服、ドラム

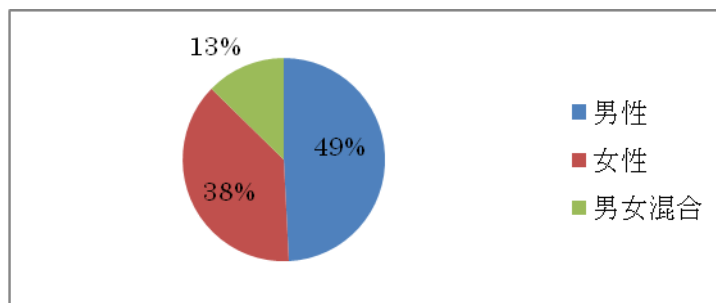
2604年 (1944年)	2604年2月1日号 (第3号)	ボウエイ ギュウグンセンシ ノ タノシイ ガイシュツ KEGEMBIRAAN PERADJOERIT PEMBELA TANAH AIR PADA HARI KELOEAR KSATRIAN.	防衛義勇兵とその家族 たちが仲良くベチャ ²⁴⁾ に乗っている。	—	防衛義勇兵(男) 1 運転手(男)1 成人(女)1 子ども(男) 赤子1	—	軍服、ベ チャ、民 族衣装
2604年 (1944年)	2604年2月15日号 (第4号)	ダイニカイチュウオウサンギンニ クンジスル サイコウシキカンカツカ ト グンセイカンカツカ(ヒダリ) P.J.M SAIKO SIKIKAN DAN P.J.M GOENSEIKAN(KIRI)JANG LAGI MEMBERI NASIHAT DALAM SIDANG TJOEJO SANGI IN KE-II.	日本軍の幹部と思われ る2人が何かを発表し ている。	軍人(男) 2	—	—	軍服、飾 緒、マイ ク
2604年 (1944年)	2604年3月1日号 (第5号)	ダイコンパタケデ、タノシクハタラ ク コドモタチ(スラバヤコウガイ) KANAK2 JANG BEKERDJA RIANG-RIA DIKEBOEN LOBAK(SEKITAR KOTA SOERABAJA).	男児5人(10歳くらい)が 大根畑で大根を収穫し ている。	—	子ども(男)5	—	制服、大 根
2604年 (1944年)	2604年3月15日号 (第6号)	新ジャワ祭 聯合体育大会 國旗掲揚式 OEPATJARA PENAIKAN KOKKI DALAM KOEMPOELAN BESAR OLAH RAGA OENTOEK MEMPERINGATI PERAJAAN DJAWA BAROE.	日章旗が掲揚された広 場に、日本軍人とイン ドネシア人男子学生整 列している。	軍人(男) 4	学生(男)数百人	—	軍服、制 服、日章 旗
2604年 (1944年)	2604年4月1日号 (第7号)	ヒマの**で楽しい常会 DIADAKAN RAPAT-BERKALA DIBAWAH DJARAK JANG DITANAM TONARI-GUMI.	8人のインドネシアの 成人女性(40-50代)が座 って話している。	—	成人(女)8	—	民族衣装
2604年 (1944年)	2604年4月15日号 (第8号)	プロボリングで出来た日本葡萄 BOWAH ANGGOER NIPPON JANG DIHASILKAN DI PROBOLINGGO.	インドネシア人の娘(10 代後半)が葡萄を収穫し ている	—	若者(女)1	—	葡萄、民 族衣装
2604年 (1944年)	2604年5月1日号 (第9号)	女子師範学校生徒の平均運動 “HEIKIN UNDO” OLEH MOERID2 SEKOLAH GOEROE POETERI.	インドネシア女学生が 平均台運動をしている 。	—	学生(女)1	—	制服、平 均台
2604年 (1944年)	2604年5月15日号 (第10号)	ジャカルタ州・タンゲラン県では衣服 自給に隣組で羊の毛を刈ってゐる MEMOTONG BOELOE BIRI2 DILAKOEKAN OLEH TONARI KUMI OENTOEK MENTJOEKOEPIKEPERLOEAN BAHAN PAKAIAN SENDIRI.(TANGERANG-KEN, DIJAKT-SHUU).	成人女性(20代前半)と男 児(10-13歳)が羊の毛刈 りをしている。	—	成人(女)1 子ども(男)1	—	羊、民族 衣装
2604年 (1944年)	2604年6月1日号 (第11号)	モンペ姿の日本女性 WANITA NIPPON JANG BERPAKAIAN MOMPE.	日本の成人女性(20-30代) 2人がモンペ姿で街を 歩いている。	成人(女) 2	—	—	モンペ
2604年 (1944年)	2604年6月15日号 (第12号)	豆自動車で遊ぶ日本の兵隊さんと子 供(ジャカルタ動物園にて) HEITAISAN DAN KANAK2 BERMAIN-MAIN DENGAN MOBIL-KATJANG.(DITAMAN RADEN SALEH)	日本軍人とインドネシ アの男児(4-10歳)たち が車に乗って遊んでい る。	軍人(男) 1	子ども(男)4	—	車、軍服 、制服

2604年 (1944年)	2604年7月1日号 (第13号)	ジャカルタ高等学校にて	インドネシア人女学生が赤子の世話をしている。	—	学生(女)1 赤子1	—	制服、湯船
		HEITAISAN DAN KANAK2 BERMAIN-MAIN DENGAN MOBIL-KATJANG.(DITAMAN RADEN SALEH)					
2604年 (1944年)	2604年7月15日号 (第14号)	新しい防空服(スラバヤにて)	インドネシア人の娘(10代後半)が防空服を着ている。	—	若者(女)1	—	防空服
		PAKAIAN PENDJAGA BAHAJA OEDARA JANG BAROE					
2604年 (1944年)	2604年8月1日号 (第15号)	楽しい勤労奉仕、防衛義勇軍の戦闘 帽作り(女子師範学校生徒)	インドネシア人女学生3人が防衛義勇兵の帽子を縫っている。	—	学生(女)3	—	軍人の帽子、制服
		PEMBOEATAN TOPI-PERDJOEANGAN OENTOEK TENTARA PETA, SOEATOE PEKERDJAAN SOEKA RELA DALAM SOEASANA RIANG GEMBIRA.(OLEH MOERID2 SEKOLAH GOEROE POETERI)					
2604年 (1944年)	2604年8月15日号 (第16号)	弾薬手入れをする防衛義勇軍	防衛義勇兵2名が弾薬の手入れをしている。	—	防衛義勇兵(男) 2	—	軍服、弾薬
		PERDJOERIT PETA SEDANG MEMELIHARA PELOEROE					
2604年 (1944年)	2604年9月1日号 (第17号)	楽しい収穫(ボゴール農事試験場)	インドネシア人の成人女性(20-30代)が米の収穫をしている。	—	成人(女)1	—	稲、農作業着
		ALANGKAH GEMBIRANJA MEMOENGOET HASIL PANEN.(POESAT PENJELIDIKAN PERTANILAN BOGOR)					
2604年 (1944年)	2604年9月15日号 (第18号)	東印度独立認可特集号	インドネシア人女学生と成人男性(30-40代)がインドネシアの国旗および日章旗を振っている。	—	成人(男)1、学生(女)7	—	インドネシアの国旗 制服 日章旗
		NOMOR ISTIMEWA OENTOEK MEMPERINGATI PERKENANAN INDONESIA MERDEKA					
2604年 (1944年)	2604年10月1日号 (第19号)	独立認可に感謝して働く労務者	インドネシア人の成人男性たち(20代後半)が造船作業を行っている。	—	成人(男)7	—	インドネシアの国旗 作業着、作業道具、日章旗
		PARA ROMUSHA BEKERDJA GEMBIRA DALAM SOEASANA “PERKENANAN KEMERDEKAAN”					
2604年 (1944年)	2604年10月15日号 (第20号)	ラッパを吹く防衛義勇軍	防衛義勇兵たちがラッパを吹いている。	—	防衛義勇兵(男) 2	—	軍服、ラッパ
		PERDJOERIT PETA SEDANG MENIOEP SELOMPRET					
2604年 (1944年)	2604年11月1日号 (第21号)	特集 輝く大戦果 働く日本女性 米空母轟沈 戦闘中の紙芝居「台湾沖航空戦」	男性が敵母艦を撃滅する絵を描いている。	—	—	成人(男)1	絵(航空部隊が敵空母撃滅)、軍服
		Nomor istimewa: Hasil kemenangan gilang gemilang Kaoem wanita Nippon jang bekerdja Kapal indoek Amerik ditenggelamkan dengan segara. Sedang menggambar Kami-Shibai “Pertempoeran oedara didekat Taiwan”.					
2604年 (1944年)	2604年11月15日号 (第22号)	ジャカルタ女子師範学校の薙刀訓練 MOERID2 SEKOLAH GOEROE POETERI DJAKARTA MELATIH DIRI DENGAN ILMOE NAGINATA	女学生たちが薙刀訓練を行っている。	—	学生(女)5	—	薙刀、ハチマキ、民族衣装

2604年 (1944年)	2604年12月1日号 (第23号)	敵機の模型により攻撃法を研究する 學徒荒鷲 Garoeda-mahasiswa sedang menjelidiki tjara2 oentoek menjerang moesoeh dgn mempergerakan model pesawat terbang moesoeh.	7人の日本軍(航空部隊) が機体の模型をもちなが ら何かを話し合っている。	軍人(男) 7	—	—	軍服、戦 闘機模型
2604年 (1944年)	2604年12月15日号 (第24号)	<なし>	航空隊員が照準を合 わせている。	軍人(男) 1	—	—	軍服、銃
2605年 (1945年)	2605年1月1日号 (第1号)	万歳を三唱 出撃せんとする薫特別攻撃隊員 ANGGOTA2 PASOEKAN “KAWORU” , TOKUBETSU KOGEKI-TAI HENDAK BERTOLAK SEDANG MENJEROEKAN BANZAI TIGA KALI.	アジア人の若者(10-20代) たちが万歳をしている。	—	—	アジ ア人 の若 者(男) 4名	軍服、銃
2605年 (1945年)	2605年1月15日号 (第2号)	<なし>	インドネシア人の娘(10 代後半)が笑顔で日本人 形を抱えている。	—	若者(女)1	—	日本人形 、民族衣 装
2605年 (1945年)	2605年2月1日号 (第3号)	<なし>	日本軍人が銃剣をもち 演習を行っている。	軍人(男) 1	—	—	軍服、銃 剣
2605年 (1945年)	2605年2月15日号 (第4号)	綿摘む女子中學生 PELADJAR POETERI SEKOLAH MENENGAH SEDANG MEMETIK BOEAH KAPAS.	女学生たちが綿を摘ん でいる。	—	学生(女)3	—	制服、綿
2605年 (1945年)	2605年3月1日号 (第5号)	郷土斯じて衛る！ 防衛義勇軍の対空攻撃演習 TANAH AIR PASTI DIBELA ! LATIHAN SERANGAN-PENANGKISAN OEDARA OLEH TENTARA PETA.	防衛義勇兵たちが対空 演習を行っている。	—	防衛義勇兵(男) 2	—	軍服、対 空用武器
2605年 (1945年)	2605年3月15日号 (第6号)	鍛へる銃後の日本女學生 PELADJAR WANITA NIPPON DIBELAKANG GARIS PEPERANGAN MELATIH DIRI.	女学生が空の方を向き 、両手をあげている。	—	—	学生(女)8	制服
2605年 (1945年)	2605年4月1日号 (第7号)	<なし>	インドネシア人男児(7~ 8歳)たちが教室で日本 語の勉強をしている。	—	子ども(男)9	—	制服、日 本語教科 書
2605年 (1945年)	2605年4月15日号 (第8号)	酷敵来れ！(スマラン市奉公推進隊) DIJKA MOESOEH JANG ANGKARA MOEREKA BERANI MENDARAT, KITA TELAH SIAP ! (Semarang Si Hookoo Suisintai)	青年(10代)たちが軍事訓 練を行っている。	—	若者(男)数十人	—	制服、旗
2605年 (1945年)	2605年5月1日号 (第9号)	ヒマの實を採りませう Marilah kita memetik boeah djarak !	インドネシア人の娘(10 代後半)がヒマの実を採 集している。	—	若者(女)1	—	ヒマの実 、服装不 明
2605年 (1945年)	2605年5月15日号 (第10号)	防空服も涼々しい軍政監部日本女子 職員 PARA PEGAWAI POETERI NIPPON DARI GUNSEIKANBU JANG TEGAP KAN BERPAKAIAN PENDJAGA BAHAJA OEDARA	日本人女性(20代)が防空 服を着て、整列してい る。	成人(女) 3	—	—	防空服
2605年 (1945年)	2605年6月1日号 (第11号)	<なし>	農民(20代)たちが牛車を 引き整列して移動してい る。	—	成人(男)2	—	牛、日章 旗、民族 衣装、鞭

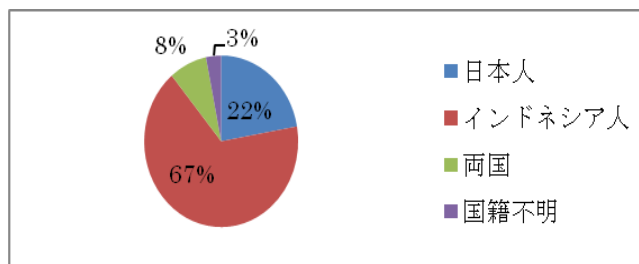
2605年 (1945年)	2605年6 月15日号 (第12号)	<不明>	インドネシア人老人が 何かを語っている。	—	老人(男) 1	—	民族衣装
		<なし>					
2605年 (1945年)	2605年7 月1日号 (第13号)	<なし>	インドネシア人の成人 男性(30代)がランニング シャツ、サルレン ²⁵⁾ 姿で 構えている。	—	成人(男) 1	—	民族衣装 (上半身 はタンク トップ)
		DJIWA RAGAKOE AKAN DIDJADIKAN PERISAI OENTOEK MEMBELA TANAH AIR ! Toean Ir.A.Safwan anggota Tyuuoo Sangi-In menggembeleng diri lahir dan batin dengan latjhan pentjak					
2605年 (1945年)	2605年7 月15日号 (第14号)	<なし>	インドネシア人の成人 女性(20代後半)が収穫作 業中に空を見上げている。	—	成人(女) 1	—	農作業着
2605年 (1945年)	2605年8 月1日号 (第15号)	<なし>	日本軍人(航空隊員)たち が談笑している。	軍人(男) 3	—	—	軍服、タ バコ、「 八幡大菩 薩」と書 かれた垂 れ幕
		NOMOR ISTIMEWA:“KEKOEATAN DIOEDARA”DARI NIPPON JANG BERPERANG, ANGGOTA TOKUBETU KOOGEKITAI DISAAT SEBENTAR SEBELOEM MEREKA MENJERBOE(PARA PAHLAWAN JG. MOEDA2 SEDANG TENANG DAN TENTERAM SAMBIL MENGISAP ROKOK, DSB.)					

付録資料2 表紙に登場する男女の比率



([倉沢編(1992a)] / [倉沢編(1992b)] / [倉沢編(1992c)] / [倉沢編(1992d)] / [倉沢編(1992e)]をもとに筆者作成)

付録資料3 表紙に登場する人物の国籍別比率



([倉沢編(1992a)] / [倉沢編(1992b)] / [倉沢編(1992c)] / [倉沢編(1992d)] / [倉沢編(1992e)]をもとに筆者作成)

〈要旨〉

日本軍政下のジャワ島における宣伝工作

－雑誌『ジャワ・バル*DjawaBaroe*』の表紙を中心に－

日本軍政下におけるジャワ島では、宣伝工作の道具としてのさまざまなメディアが存在していた。これらのメディアは、新聞にはじまり、映画、紙芝居、グラフ雑誌、漫画、ラジオなどその種類はさまざまなものであった。本研究は、これらメディアのなかでもとりわけグラフ雑誌の表紙を考察対象として取りあげ、軍政当局の宣伝工作の一端を解明したものである。

当時ジャワ島では、グラフ雑誌『ジャワ・バル*DjawaBaroe*』(以下、『ジャワ・バル』と記す。)が刊行されていた。軍政当局は、『ジャワ・バル』を利用し宣伝工作を行っていたのである。

『ジャワ・バル』の表紙は、被写体が主に人であり、現地住民人および日本人の両国民が登場している。『ジャワ・バル』の表紙に登場するインドネシアの女性たちは、「日本に協力」し、「日本の文化」を取り入れた、換言すれば、「日本化」がなされた女性たちであった。一方で、表紙に登場するインドネシアの男性たちは、「日本の指導の下に頑張る」または「勇ましい」男性たちであった。さらに、軍政当局は、「優しいイメージ」の日本軍人を表紙に登場させることによって、日本軍のイメージを上げる、といった宣伝工作も行っていたのである。

以上のように、軍政当局は、表紙という「雑誌の顔」に彼らを被写体として登場させ、現地住民の「模範」を創り出していたのである。

The propaganda in Java in Japanese military administration

－Focusing on the cover of the magazine “DjawaBaroe”－

In Java in Japanese military administration, there were various types of media as a tool of propaganda, for example, newspaper, movie, picture-story show, pictorial magazine, comics, and radio. Military authorities took advantage of these media and developed a wide range of propaganda. This study will especially focus on pictorial magazine among these media and elucidate a part of the propaganda of the military authorities.

At that time, pictorial magazine “DjawaBaroe” has been published in Java.

Military authorities were doing the propaganda using “DjawaBaroe”.

The cover of “DjawaBaroe”, the object is a human mainly, both Indonesia people and Japanese people have appeared.

Women in Indonesia, which appeared on the cover of “DjawaBaroe”, seems to cooperate with Japan and accept Japanese culture. In other words, we can say that they were women who were Japanized. On the other hand, men in Indonesia, which appeared on the cover of “DjawaBaroe” seems to be brave and work hard under the guidance of Japan. In addition, military authorities had also carried out propaganda by making appeared on the cover of the Japanese military “friendly image,” and raise the image of the Japanese military.

As described above, military authorities made them appear to the “face of the magazine” as object and had been creating a “model” of local residents.